

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 7 号 (9 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	
イネ	穂いもち (中晩生)	並 (やや少)	チャ	チャノホソガ	山城: やや少 (やや多) 丹波: 並 (やや多) 丹後: 多 (多)	
	紋枯病 (中晩生)	多 (並)		カンザワハダニ	山城: 多 (やや多) 丹波: 多 (やや多) 丹後: 並 (並)	
	トビイロウンカ (中晩生)	並 (並)		チャノミドリヒメヨコバイ	山城: 多 (やや多) 丹波: やや少 (やや少) 丹後: 多 (多)	
	コブノメイガ (晩生)	やや多 (多)		チャノキイロアサミウマ	山城: やや少 (やや少) 丹波: 並 (やや多) 丹後: 並 (やや少)	
斑点米カメムシ類 (中晩生)	やや多	クワシロカイガラムシ		山城: 多 (多) 丹波: 並 (並) 丹後: やや多 (並)		
黒大豆	ハスモンヨトウ	多 (やや多)		野菜	果菜類 うどんこ病	やや多 (並)
	吸実性カメムシ類	並 (並)			果菜類 疫病・褐色腐敗病	並 (並)
	ハダニ類	多 (多)			キュウリ 褐斑病	やや少
アズキ	ハスモンヨトウ	多 (多)			キュウリ 炭そ病	並
	ハダニ類	多 (多)			野菜全般 ハダニ類	やや多 (並)
	オオタバコガ	やや少 (やや多)	野菜全般 アブラムシ類		やや少 (少)	
果樹	ナシ 黒斑病	並 (少)	果菜類 アサミウマ類		やや多 (並)	
	ナシ 黒星病	多 (並)	ネギ ^〴 ネギ ^〴 アサミウマ		多 (並)	
	ブドウ ベと病	少 (やや少)	ネギ ^〴 ネギ ^〴 ハモク ^〴 リハ ^〴 エ		少 (並)	
	カキ うどんこ病	やや少 (少)	果菜類等 ハモク ^〴 リハ ^〴 エ類		やや少 (並)	
	カキ 炭そ病	並 (並)	アブラナ科野菜 コナガ	並 (並)		
	果樹全般 カメムシ類	並 (やや少)	ホウレンソウ シロホ ^〴 ノメイガ ^〴	並		
チャ	ナシ ハダニ類	やや多 (多)	野菜全般 ハスモンヨトウ	やや多 (並)		
	カンキツ ハダニ類	多 (多)				
	炭そ病	山城: 少 (少) 丹波: 並 (少) 丹後: 並 (並)				
	もち病	山城: 並 (少) 丹波: 並 (並) 丹後: 並 (並)				
	チャノコカクモンハマキ	山城: 多 (やや多) 丹波: 多 (多) 丹後: 並 (並)				

目次

予報の概要	1	参考 I 気象予報	2 3
予報本文	2	II 用語の定義	2 3
今後注意すべきその他の病虫害等	2 1	III 予報本文の見方	2 4
		IV 短期暴露評価の実施に伴う 農薬の変更登録について	2 5

予報本文

イ ネ

1 いもち病（穂いもち：中晩生）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（1）8月中旬現在、葉いもちの発生は山城、中丹で平年並、南丹で平年比やや少なく（－）、丹後で平年比多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発生ほ場率（％）	50.0	26.7
	発病株率（％）	3.3	4.0
	発病葉率（％）	0.04	0.07
南丹	発生ほ場率（％）	22.2	32.0
	発病株率（％）	2.7	7.8
	発病葉率（％）	0.06	0.21
中丹	発生ほ場率（％）	16.7	18.3
	発病株率（％）	1.3	2.6
	発病葉率（％）	0.01	0.15
丹後	発生ほ場率（％）	44.4	5.3
	発病株率（％）	4.4	1.1
	発病葉率（％）	0.08	0.04

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く（＋）、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの主な伝染源となる。

（2）穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。

（3）発病に要する温度範囲は、14～30℃、適温は25℃である。

（4）出穂後曇雨天が続く場合には、傾穂期前後にも防除を行う。特に枝梗は遅くまで菌の侵入を受けるので、枝梗いもちの発生に注意する。

（5）ヒノヒカリ、祝、京の輝き等、発病しやすい品種では注意する。

（6）平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部においてストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌の発生を確認した。耐性菌の発生地域では、いもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。

詳細は京都府病害虫防除所ホームページ

（アドレス http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news20131113_2.pdf）を参照のこと。

2 紋枯病（中晩生）

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

（1）8月中旬現在、発生量は山城で平年比多く（＋）、南丹で平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	発生ほ場率(%)	66.7	40.7
	発病株率(%)	14.7	5.5
	発病度	5.2	1.7
南丹	発生ほ場率(%)	22.2	48.2
	発病株率(%)	1.3	7.6
	発病度	0.4	2.8

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く(+)、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温多湿で発病が助長され、病斑が上位へ進展すると被害が大きくなる。
- (2) 昨年多発したほ場では、浅水管理に心掛け上位葉鞘への進展を抑える。
- (3) ほ場内をよく見回り、病斑が上位へ進展している株が多い場合は防除を行う。

3 トビイロウンカ(中晩生)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 8月17日現在、予察灯への誘殺を認めていない(平年並)。
- (2) 8月中旬の巡回調査では発生を認めていない(平年並)。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- (2) 8～9月の気温が高いと増殖に好適である。
- (3) 低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

4 コブノメイガ(晩生)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在の発生量は平年比やや多い(+)。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	26.7	10.1
被害株率(%)	0.1	2.0

※本田25株見取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉を筒状に綴って食害し被害痕が白く目立つが、収量・品質に影響がでるのは上位葉の被害が多い場合のみである。少し食害が目立つ程度であれば、収量・品質にはほとんど影響はない。
- (2) 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネには成虫が集中的に飛来するので注意する。

5 斑点米カメムシ類(中晩生)

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、本田での発生量は山城及び南丹で平年比やや多い(+)。

地域	項目	本年	平年値
山城	発生ほ場率(%)	66.7	25.5
	虫数(頭)	1.5	0.7
南丹	発生ほ場率(%)	66.7	45.2
	虫数(頭)	2.3	1.4

※本田20回すくい取り調査。

(2) 8月中旬現在、畦畔雑草での発生量は山城で平年並、南丹で平年比やや多い(+)

地域	項目	本年	平年値
山城	発生ほ場率(%)	66.7	68.1
	虫数(頭)	6.8	14.5
南丹	発生ほ場率(%)	33.3	34.1
	虫数(頭)	3.9	2.7

※畦畔雑草20回すくい取り調査。

(3) 山城の予察灯でミナミアオカメムシの誘殺を確認している(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除(共同、一斉)が有効である。また、粒剤では種類により使用時期が決まっているので、防除適期に施用する。
- (3) 平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。本種は他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

* 京都府奨励品種の中生品種：京の輝き、祭り晴、祝、新羽二重糯
" 晩生品種：ヒノヒカリ

黒大豆

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比多い(前年比やや多い)
予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	4.0	1.1
白変葉数(枚/10a)	2.0	0.8

(2) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比多い(+)

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	96.2	165.8
亀岡市	誘殺数(頭)	593.1	218.1
京丹後市	誘殺数(頭)	254.0	163.0

*誘殺数(頭)：7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

(3) 普及指導員、病害虫調査協力員から一部地域での発生が報告されている(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生は10月下旬頃まで続く。発生量は9月上中旬に最も多くなる。
- (2) 成虫は葉裏に数百個の卵を塊状に産みつける。卵塊は綿毛状のもので覆われ、卵粒は見えにくくなっている。ふ化した幼虫は若齢期(1~2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透け見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (3) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、ほ場を見回り白変葉の早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除くとともに、薬剤散布を行い、初期防除に努める。

平成28年7月26日付け「防除所ニュース平成28年第5号」参照

2 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	1.0	2.0

- (2) 8月第3半旬現在、予察灯への誘殺数は平年並。

種類	場所	項目	本年	平年値
アオクサカメムシ	京田辺市	誘殺数(頭)	1	0.9
	亀岡市	誘殺数(頭)	0	1.3
	京丹後市	誘殺数(頭)	0	0.3
イチモンジカメムシ	京田辺市	誘殺数(頭)	0	0.0
	亀岡市	誘殺数(頭)	0	1.2
	京丹後市	誘殺数(頭)	0	1.0

*誘殺数(頭)：7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 吸実性カメムシ類には、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ等がいる。
- (2) クズやレンゲ等の雑草が自生する場所は好適な発生地となりやすく、このような場所が周辺にあるほ場は、カメムシ類の被害を受けやすい。
- (3) 開花期直前から着莢期に成虫が飛来し、吸汁や産卵をする。成虫は好適な餌がある場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま滞在し、黄熟期まで加害し続けるため、薬剤散布は着莢期から10日間隔で2~3回実施する。

3 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比多い(+)

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	24.5	8.3

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天で高温乾燥が続くと多発しやすくなる。
- (2) 増殖が速く、高密度になってからでは防除効果が劣るので、初期防除に努める。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合があるので注意する。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 21 を参照

アズキ

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	0.4	0.3
白変葉数(枚/10a)	0.4	0.1

- (2) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比多い（+）。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	96.2	165.8
亀岡市	誘殺数(頭)	593.1	218.1
京丹後市	誘殺数(頭)	254.0	163.0

*誘殺数(頭)：7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

- (3) 普及指導員、病害虫調査協力員から一部地域での発生が報告されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 黒大豆の病害虫の項参照のこと。

平成28年7月26日付け「防除所ニュース平成28年第5号」参照

2 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比多い。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	1.1	0.1

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 黒大豆の病害虫の項参照のこと。

3 オオタバコガ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺は、京田辺市、京丹後市

で認めず（平年並）、亀岡市で平年比少ない（－）。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	0.0	0.7
亀岡市	誘殺数(頭)	0.7	25.8
京丹後市	誘殺数(頭)	0.0	0.0

*誘殺数(頭)：7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

(2) 8月中旬の巡回調査で発生を認めている(+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) オオタバコガの発生は、子実害虫類（アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など）と発生時期が異なる場合があるので、注意が必要である（葉も食害するので、開花期以外にも発生する）。
- (2) B T 剤のサブリナフロアブル、チューンアップ顆粒水和剤に登録がある。

※今後注意すべきその他の病虫害等は p 2 1 を参照

果 樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比少ない）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	5.2	7.9

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 収穫期に降雨が多い年は、袋掛けした果実でも、袋の口から雨水とともに分生子が流れ込み、発病することがある。
- (2) 夏から秋に掛けての葉での発生は、枝病斑やボケ芽の発生を招き、翌年の感染源になる。落葉した発病葉も翌年の感染源になるので、防除を徹底する。特に、若い葉や枝のある徒長枝が発病しやすいので、薬剤散布は棚上の徒長枝にも薬剤が掛かるように丁寧に行う。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年比多い(+)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	1.0	0.2

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が低下し、降雨が続くと、発生が多くなる。
- (2) 秋型病斑は葉裏全面に発生し、春季とは様相が異なる。特に、徒長枝の若い葉が発病しやすく、これは翌年の芽基部発病に繋がるので、薬剤散布は棚

上の徒長枝にも薬液が掛かるように丁寧に行う。
 (3) 晩冬には、落葉した被害葉の裏面上には偽子のう殻が形成される。翌春、ここから子のう胞子が飛散し、これも感染源となる。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年比少ない（－）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	3.3	15.8

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 本病の発生適温は22～25℃である。気温が低下し、降雨が続くと、発生が多くなる。

(2) 病原菌は落葉した被害葉の組織内に卵胞子を形成して越冬し、翌年の感染源となる。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	18.7	28.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 本病の発生適温は15～25℃である。夏季の高温時には病勢が治まるが、9月に入って気温が低下すると、病原菌の活動が再び活発になる。

(2) 秋季に発病した葉の裏側には、白い菌叢が見られる。9月下旬には、菌叢の中に黄色から橙紅色の粒点が現れ、やがて黒色の子のう殻が形成される。子のう殻は落葉とともに土中で越冬し、翌年の感染源となる。

5 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病果率(%)	0.0	0.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 9～10月に雨が多いと、果実の被害が増える。

(2) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多いので

- 害虫防除も徹底する。
 (3) 本病は、被害枝や被害芽のなかで菌糸の状態越冬する。

6 果樹全般 カメモムシ類

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月第3半旬現在、チャバネアオカメモムシの予察灯への誘殺数は平年並。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	6	88.5
亀岡市	誘殺数(頭)	13	12.9
京丹後市	誘殺数(頭)	13	72.6

*誘殺数(頭)：7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

- (2) 8月第3半旬現在、チャバネアオカメモムシのフェロモントラップへの誘殺数は平年並。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	5.8	24.9
亀岡市	誘殺数(頭)	24.0	56.1
京丹後市	誘殺数(頭)	0.0	24.7

*誘殺数(頭)：7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。スギ、ヒノキの球果の形成が少ない年は、果実の被害が多い傾向にある。
 (2) 収穫期に近い果樹は、他の病虫害防除も含めて、農薬の使用にあたっては使用基準(特に収穫前日数)を厳守する。
 (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用するとカイガラムシ類やハダニ類の発生が増えることがある。果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。

7 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年比やや多い（前年比多い）

カンキツ 平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量はナシで平年比やや多く(+)、カンキツで平年比多い(+)

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	13.0	11.2
カンキツ	寄生葉率(%)	56.3	11.1

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。
 (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。特に合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
 丹波 平年並（前年比少ない）
 丹後 例年並（前年並）

予報の根拠

（1）8月中旬現在の発生量は、山城で平年比少なく（－）、丹波、丹後で平年並（例年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数（枚／m ² ）	0.0	1.1
	発生ほ場率（％）	0.0	16.2
丹波	発病葉数（枚／m ² ）	10.5	9.8
	発生ほ場率（％）	50.0	43.0
丹後	発病葉数（枚／m ² ）	1.0	1.1
	発生ほ場率（％）	75.0	30.6

（2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）本病が感染するのは新葉に限られ、新芽伸育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- （2）秋に残った罹病葉は、翌春の伝染源になる。
- （3）防除適期は、夏秋茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 もち病

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比少ない）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

予報の根拠

（1）8月中旬現在、府内全域で発生を認めていない（山城、丹波、丹後：平年（例年）並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数（枚／m ² ）	0.0	0.8
	発生ほ場率（％）	0.0	0.5
丹波	発病葉数（枚／m ² ）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0
丹後	発病葉数（枚／m ² ）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0

（2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多く（＋）、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。
- （2）山間地で発生が多い。
- （3）病原菌は、芽に付着して越冬し、翌春の伝染源になる。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比多い（前年比やや多い）

丹波 平年比多い（前年比多い）
 丹後 例年並（前年並）
 発生時期：第4世代幼虫ふ化期
 山城 9月第3半旬～4半旬（平年比早い）
 丹波 9月第3半旬～4半旬（平年比やや早い）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年比多く（+）、丹後で発生を認めていない（例年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数（枚／㎡）	0.3	0.9
	幼虫・蛹数（枚／㎡）	4.3	0.4
	発生ほ場率（%）	13.6	10.1
丹波	綴葉数（枚／㎡）	3.7	0.9
	幼虫・蛹数（枚／㎡）	2.2	0.4
	発生ほ場率（%）	50.0	11.7
丹後	綴葉数（枚／㎡）	0.0	2.6
	幼虫・蛹数（枚／㎡）	0.0	0.0
	発生ほ場率（%）	0.0	8.3

(2) 第2世代成虫の発生時期は宇治、綾部で平年比やや早い。

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 通常、第4世代幼虫が10月上旬～10月中旬に発生し、綴った葉の中で越冬して翌春の発生源となる。

(2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

(3) 昨年、山城地域においてジアミド系及びDAH系IGR剤に抵抗性を発達させた個体群が確認された。そのため、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は使用を中止し、他系統の薬剤を使用する。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年比やや多い）
 丹後 例年比多い（前年比多い）
 発生時期：第4世代幼虫ふ化期
 山城 8月第5半旬～8月第6半旬（平年比やや早い）
 丹波 8月第6半旬～9月第1半旬（平年並）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、第3世代幼虫の発生量は山城で平年比やや少なく（-）、丹波では平年並、丹後で例年比多い（+）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率（%）	0.2	7.3
	巻葉数（枚／㎡）	0.1	1.8
	発生ほ場率（%）	14.3	36.1
丹波	寄生芽率（%）	0.7	7.1
	巻葉数（枚／㎡）	0.0	0.4
	発生ほ場率（%）	33.3	20.0
丹後	寄生芽率（%）	60.0	15.9
	巻葉数（枚／㎡）	20.3	1.5
	発生ほ場率（%）	100.0	75.0

(2) 第2世代成虫の発生時期は、宇治、綾部で平年並。

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返し、9月中下旬に第4世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 第5世代幼虫ふ化期が、最終の防除適期にあたるので、多発園では防除を徹底する。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比多い(前年比やや多い)
丹波 平年比多い(前年比やや多い)
丹後 例年並(前年並)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年比多く(+)、丹後で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	4.6	3.6
	寄生虫数(頭/100葉)	28.1	9.0
	発生ほ場率(%)	36.4	35.1
丹波	寄生葉率(%)	14.0	3.0
	寄生虫数(頭/100葉)	41.7	10.3
	発生ほ場率(%)	83.3	48.3
丹後	寄生葉率(%)	1.5	6.9
	寄生虫数(頭/100葉)	5.5	28.9
	発生ほ場率(%)	50.0	52.8

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比多い(前年比やや多い)
丹波 平年比やや少ない(前年比やや少ない)
丹後 例年比多い(前年比多い)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は山城、丹後で平年比(例年比)多く(+)、丹波で平年比やや少ない(-)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率(%)	10.4	3.5
	発生ほ場率(%)	33.3	29.1
丹波	寄生・被害芽率(%)	0.7	8.2
	発生ほ場率(%)	33.3	57.3
丹後	寄生・被害芽率(%)	3.5	0.9
	発生ほ場率(%)	100.0	16.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等で

ある。

- (2) 少雨で乾燥した条件で増加しやすい。
- (3) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (4) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同一系統の使用を避ける。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年比やや多い）
丹後 例年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波、丹後で平年並（例年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率（％）	27.2	33.3
	発生ほ場率（％）	95.2	91.5
丹波	寄生・被害芽率（％）	12.0	19.9
	発生ほ場率（％）	66.7	86.0
丹後	寄生・被害芽率（％）	54.0	49.8
	発生ほ場率（％）	100.0	94.4

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高い場合は注意する。
- (3) 発生密度が高いと1回の防除では効果が劣るので、5～7日おきに2回の防除が必要である。
- (4) ネオニコチノイド系、ピレスロイド系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同一系統の使用を避ける。

8 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年比多い（前年比多い）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は山城で平年比多く（＋）、丹波で平年並、丹後で例年比やや多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生株率（％）	49.0	15.5
	発生ほ場率（％）	72.7	59.1
丹波	寄生株率（％）	30.8	22.1
	発生ほ場率（％）	83.3	64.7
丹後	寄生株率（％）	46.3	16.7
	発生ほ場率（％）	100.0	41.7

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。
- (2) 通常、防除適期である第3世代幼虫ふ化期は9月下旬から10月上旬である。

(3) 多発している園も認められるので、園を見回り発生が多い園では防除する。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 21 を参照

野菜

1 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、キュウリでは発生を認めず（平年並）、ナスでの発生は平年比やや多く（+）、トウガラシでは例年並。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	発病株率 (%)	0.0	2.1
ナス	発病株率 (%)	37.9	21.6
トウガラシ	発病株率 (%)	2.0	6.5

※ トウガラシの値は例年値

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (2) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- (3) トウガラシ類では、ハダニ類による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- (4) 降雨が続く場合は病勢の進展に注意し、雨の合間をみて防除するよう心掛ける。

2 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染し、多湿条件下で発生が多い。特に、豪雨により冠水、滞水したほ場では発生に注意する。
- (2) ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (3) マルチを行い、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。

3 キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、巡回調査では発生を認めていない（平年比やや少ない）。

項目	本年	平年値
発病葉率 (%)	0.0	15.4
発病株率 (%)	0.0	32.6

(2) 普及指導員から、一部地域で発生が報告されている。

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 発病適温は25～30℃で、高温多湿条件下で多発する。

(2) 一度発生したほ場では、毎年発生することが多い。

(3) 施設栽培では換気を十分に行い、かん水も過多にならないようにし、高温多湿に注意する。

(4) 窒素質肥料の過多は耐病性を低下させ、一方、肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(5) 降雨が続く場合は病勢の進展に注意し、雨の合間をみて防除するよう心掛ける。

(6) 被害葉上の胞子は乾燥状態では相当長く生存するので、被害葉は土中深く埋めるか焼却処分する。

4 キュウリ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(-)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 気温22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。

(2) 種子伝染するほか、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。

(3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するので注意する。

(4) 降雨が続く場合は病勢の進展に注意し、雨の合間をみて防除するよう心掛ける。

5 野菜全般 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、キュウリでは発生を認めず（平年並）、ナスでの発生は平年比やや少なく(-)、トウガラシでは例年比やや多い(+)

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	0.00	0.07
	寄生葉率(%)	0.0	0.9
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.01	0.30
	寄生葉率(%)	0.3	3.2
トウガラシ	寄生株率(%)	4.0	4.0

※ トウガラシの値は例年値

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

(3) 病害虫調査協力員から、ナスでの多発生が報告されている(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

6 野菜全般 アブラムシ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、キュウリ、トウガラシでは発生を認めず(キュウリ：平年並、トウガラシ：例年比少ない)、ナスでの発生は平年比やや少ない(-)。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	0.00	4.45
	寄生葉率(%)	0.0	4.8
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.001	0.03
	寄生葉率(%)	0.1	1.0
トウガラシ	寄生株率(%)	0.0	8.5

※ トウガラシの値は例年値

- (2) 8月第3半旬現在、黄色水盤への飛来数は平年比やや少ない(-)。

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に注意する。

7 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年並)

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、キュウリでは発生を認めず(平年並)、ナスでの発生は平年比やや多い(+)

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数（頭／葉）	0.00	0.002
	寄生葉率（％）	0.0	0.2
ナス	寄生虫数（頭／葉）	0.02	0.01
	寄生葉率（％）	1.3	1.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害する種だけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等のようにウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

8 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在の発生量は平年比多い(+)。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	66.0	12.6
被害度	16.5	5.6

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) **本種は府内各地で発生が問題となっているネギえそ条斑病（p.2.1今後注意すべき病害虫の項参照）を媒介する。**
- (5) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus: IYSV）による病害で、本病の防除には**ネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的**である。
詳細については、京都府病害虫防除所ホームページの情報（平成27年防除所ニュース第5号
(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/201511news.pdf>)や4月20日発表の発生予察注意報第1号（ネギアザミウマ・ネギえそ条斑病）
(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tyuiho201601.pdf>))を参照のこと。

9 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比少ない(-)。

項目	本年	平年値
被害株率 (%)	18.0	57.8
被害度	4.5	21.2

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

10 果菜類等 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年並)

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、キュウリでの発生は平年比少なく(-)、ナスでの発生は平年比やや少ない(-)。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	被害葉率 (%)	0.0	10.5
	発生ほ場率 (%)	0.0	81.7
ナス	被害葉率 (%)	1.4	6.8
	発生ほ場率 (%)	42.9	72.9

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマトハモグリバエは、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (3) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (4) シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
- (5) 幼虫が葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後、速やかに行い防除時期を逸しないようにする。
- (6) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

11 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 8月第3半旬現在、予察灯への誘殺数は京田辺市、京丹後市で平年並、亀岡市で平年比少ない(-)。

場所	本年	平年値
京田辺市	1	1.4
亀岡市	2	8.2
京丹後市	5	4.3

※ 誘殺数（頭）は7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

(2) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、亀岡市では平年比やや多く（+）、京丹後市では平年並。

場所	本年	平年値
亀岡市	42.4	22.9
京丹後市	0.0	2.5

※ 誘殺数（頭）は7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
- (2) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (3) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

12 ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

(1) 8月第3半旬現在、予察灯への誘殺数は、京田辺市、亀岡市で平年並、京丹後市では平年比やや多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	0.3
亀岡市	0	0.9
京丹後市	3	0.9

※ 誘殺数（頭）は7月第4半旬～8月第3半旬の合計値

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は日本海側で平年並、太平洋側では平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晩夏以降に多発するようになる。
- (2) 秋期の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。特に、施設栽培や雨よけハウスでは多発しやすいので注意する。
- (3) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。

13 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 8月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で平年比少なく（-）、亀岡市、京丹後市で平年比多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	96.2	165.8
亀岡市	593.1	218.1
京丹後市	254.0	163.0

※ 誘殺数（頭）は7月第4半句～8月第3半句の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 1枚の葉に数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期（1～2齢）を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (2) ダイズやサトイモなどハスモンヨトウの初発を確認しやすい作物で、白変葉の有無等発生状況の観察に努める。
- (3) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

※ 今後注意すべきその他の病害虫等は p 21～22 を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

黒大豆、アズキ

1 子実害虫類（黒大豆：サヤムシガ類など、アズキ：アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など）

- （1）幼虫が莢や莢内に食入すると、防除効果が劣るので、幼虫ふ化時期～食入開始時期の防除が重要である。
- （2）開花初めから10日間隔で2～3回の防除が有効である。

チャ

1 チャトゲコナジラミ

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 軟腐病（キャベツ、ハクサイ、カブなど）

発生すると大きな被害となるので予防防除に努める。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。
- （2）台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、キスジノミハムシ、コオロギ等食葉性害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多い。
- （3）台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努める。

2 ネギさび病

本年の発生は、早春から梅雨明け時まで平年比多発の状態と推移した。盛夏期の高温により発生は一旦終息しているが、気温が25℃を下回る9月中旬以降は、病原菌の活動が再び活発になるので、発生には十分注意する。

3 ネギえそ条斑病

8月中旬の巡回調査で、山城地域の各地及び南丹地域の一部で発生を確認している。今後も引き続き、本病の発生に注意する。

4 シロイチモジヨトウ

8月中旬の巡回調査で、平成17年以来、11年振りに山城地域の一部地域のネギで発生を確認した。今後の本種の発生に注意する。

5 オオタバコガ、タバコガ

発生すると大きな被害となるので注意する。

幼虫が果実等に食入したり、また幼虫の齢が進むと防除効果が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期に防除する。

6 ハイマダラノメイガ〔ダイコンシンクイムシ〕（アブラナ科）

生育初期に加害されると欠株等が生じ、大きな被害となるので注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 8月下旬以降、10月下旬頃まで発生する。
- (2) 株の生長点部を食害するため、被害株は生育が停止したままとなったり、枯死するものが多い。
- (3) 苗床や定植直後によく観察し、発生を認めたら直ちに防除する。
- (4) は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。

7 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus) の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

施設栽培

- (1) 黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。
- (2) 先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土中に埋める等、適正に処分する。

8 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプ J p L 等）、バイオタイプ B、バイオタイプ Q が確認されている。

バイオタイプ Q は薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。
 - (2) 黄色粘着ロールの展張。
 - (3) 近紫外線カットフィルムの使用。

- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - (1) 発生初期の防除の徹底。
 - (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
 - (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。

- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (8月20日から9月19日までの天候見通し)

平成28年8月18日
大阪管区气象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、近畿太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2～4週目は、高い確率50%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	10	20	70
降水量(近畿日本海側)	30	40	30
〃 (近畿太平洋側)	20	40	40
日照時間	30	40	30

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または多く、日照時間は平年並と予想されている」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去10か年の平均とする。

データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※ 病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(ADI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録の前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

(ご注意)

本内容は、国(農林水産省等)や農薬メーカーからの情報を府民の皆さまにお伝えするために掲載しています。したがって、掲載するまでに時間がかかることがあります。

1 最新の使用基準を確認して使用していただきたい農薬

※ラベルどおりに使用すると問題となることがあるため、最新の使用基準を各農薬メーカーのホームページ等で確認してください。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
カルボスルファン ベンフラカルブ (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

2 今回の制度の導入により使用基準の変更があった農薬

※ラベルどおり使用していただければ問題ありません。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
ジメトエート (平成27年2月4日)	ジメトエート乳剤、ジメトエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネート (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除
シハロトリン (平成27年10月14日)	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
メタフルミゾン (平成27年11月25日)	アクセルフロアブル	使用時期変更
ピリダベン (平成28年1月6日)	サンマイトフロアブル	適用作物削除
イプロジオン (平成28年4月20日)	ロブラール水和剤、ロブラール500アクア	適用作物削除 希釈倍数変更
ジラム (平成28年4月27日)	コニファー水和剤	適用作物削除

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます。
(要登録) また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、
使用していただきますようお願いいたします。

○参 考

厚生労働省(急性参照用量(ARfD))を考慮した食品中の残留農薬基準の設定について)
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040984.pdf> (外部リンク)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040985.pdf> (外部リンク)

農林水産省農薬コーナー(農薬に関する施策関係)
<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/> (外部リンク)

独立行政法人農林水産消費安全技術センター(農薬登録情報の検索)
<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vt11m000.html> (外部リンク)

農薬工業会(使用制限にかかわる登録変更)
http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1 (外部リンク)

詳しくは、**京都府農林水産部食の安心・安全推進課のウェブサイト**
(<http://www.pref.kyoto.jp/shokuanzenbosai/news/documents/tankibakurohyoka.html>)
をご参照願います。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。
ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病虫害情報サービス

ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9
TEL 0771-23-9512
FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－